

# 秘密厳守の匿名セラピストボーイに、年 甲斐もなく濃厚連続種付けセックスして しまった

体験版

落ち込み気味ノンケインテリ社長×乗せ上手男性向け性感マッサージセラピスト

攻め：佐島（さじま）

受け：ミア

要素：おじさん攻め、年の差、性感マッサージ、受けフェラ、立ちバック、中出し、連続絶頂

いざという時のために、備えが必要になったのはいつからだろうか。かつてはその気がなくても、抱こうと思えば行為成立のために必要なことは全て行えていた。それなのにこの下半身ときたら、最近はめっきり元気がなくなっている。

「社長、何か考え事ですか」

「ああ。いや、まあ少し。大したことじゃない」

そんな私のマイナス思考を断ち切ったのは、秘書の声だった。工作中的社長室で考えるべきことではないので、秘書には悩みの内容は伏せておく。無難な答えを返し、何事もない普段の自分を装った。しかし仕事に支障はなくとも、私の悩みは根深く相談しづらい。

ここのところ、どうも自分がED気味なのではないかと心配していた。不安なら医者に行けばいい話だが、いざEDだと診断された方がショックが大きいので、ひとまずは加齢による機能低下だと言い聞かせている。医者以外に相談したい気持ちはあるが、社長という立場上、いらぬ噂一つで会社の評判が左右されることもある。うかつに打ち明けられる内容ならともかく、繊細な部分は伏せるしかない。

ED疑惑をはらすために、いっそ身体も心も悩みを解消してくれる相手を作る方がいいのでは、とも考えた。だが、性的なケアで回復をはかる場合、女性が相手だとその人を傷つけることもあるのではないかと尻込みしている。

なのでここのところは、一周回ってケアをしてもらうなら男性の方がいいのではないかと思い始めていた。男性と身体の関係になった経験はないが、女性よりも相談しやすそうだし、性の悩みには共感できる部分も多いだろう。とはいっても自分の家に呼んだり、知り合いのいる土地で店を探すとボロがでそうなので、実践は次の出張時にと心に決めていた。

そして、悶々と悩むこと約半年。覚悟が決まった私は、接待終わりに帰ってきたホテルで、深夜に呼べそうな風俗店を探していた。時間が夜遅く、男性が男性を接客する店となると多くは見つからなかったが、奇跡的にひとつ、今からでも案内可能な店があった。

「男性専用性感マッサージ店、top secretか…」

高級感のあるホームページには、当然だが男性の写真しか載っていない。本当に男性を呼ぶことになるのかと躊躇してしまっただが、酒の力を借りて電話をした。値が張ることもあり、電話対応はかなり丁寧で、初めて利用する私に対しても親切にシステムを説明してくれた。不安が少し解消されたので、そのまま現在予約できる男性の中から、お店おすすめの「ミア」というセラピストを指名した。到着までは30分ほどと、なかなか早い。シャワーを浴びて待っていてほしいと伝えられたので、軽く体を流して待機した。

そして30分ほど経った時に、ホテルの前に着いたので、まもなくセラピストが部屋に着くと店から連絡が入った。ほどなくして、部屋の扉がノックされる。内鍵をあけて扉を開くと、そこには初めて見る男性が立っていた。

「こんばんは！ top secretのミアです。佐島さんでお間違いないでしょうか？」

扉の前で愛くるしく笑うのは、自分より一回り以上は若い男の子だ。けれどここで、私は少し驚いた。なぜなら、彼があまりにも普通の年下の男の子、といった雰囲気だったからだ。ぽかんと口を開いて、少しの間固まってしまう。

勝手なイメージだが、そういった店で働く人物は、いかにも夜の仕事をしていますと一目でわかる風貌だと思っていた。だが、ミアと名乗る男性は、昼間は大学に通っていると言われても遜色ない、街で歩いていそうな普通の男の子だ。髪の毛も暗い茶色で、軽くセットはされているが、遊んでいる印象は受けない。タオ

ルなどが入った大きなバックは目につくものの、ホテルという場所柄もあり、旅行者と言われても不思議ではないだろう。

言い方は悪いが、もっと派手な見た目の子か、口調からしてその道の人、といった男性が来ると思っていた。だからこそ、彼は本当に風俗店から派遣されてきたのかと、私の方が困惑してしまう。

「部屋は合っているけど…。君、本当にお店の子？」

「あれ、疑ってますか？まあ僕、あんまりネコ顔じゃないですもんね」

「ネコ顔…？」

「えっ、あれ？もしかして佐島さんがネコ希望でした？いや、そもそもネコが分からない？佐島さん、タチとかネコって知ってます？」

「いや、あまり…」

「…佐島さん、もしかしてゲイじゃない？実はノーマルな人…？」

「ああ、そう、そうなんだが…。ううん、話すと長くなるんだ。お金は先に払うから、ことを進める前に事情を説明してもいいかな。ここで立ち話も変だから、中において」

そして困惑する私を見て、事情を知らないミアと名乗った青年はかなり焦っていた。店を勘違いしたり、遊び半分で呼ばれたりするケースもなくはないだろうから、彼も困っている様子だ。ただ、私の性対象は男ではなくとも、彼を呼んだ理由はある。それをまずは、代金を払ったうえで詳しく説明することにした。

「こんな夜遅くに来てくれてありがとう。君のことは、ミア君と呼んだらいいのかな」

「とんでもない！僕こそ呼んでいただいて嬉しいです。名前は言いやすいので呼んでください。ミアと呼び捨てでもいいですし。僕は佐島さんのこと、どのようにお呼びしましょうか」

「私は佐島でかまわないよ。そうだな、呼び捨ては気が引けるから、君のことはミア君と呼ばせてほしい。それで、どうして私がミア君を呼んだのか、という話なんだが――」

ベッドのそばに荷物を置いたミアと並んで、ベッドの端に座る。体を少しこちらに向けたミアと軽い挨拶を済ませてから、私は最近の下半身の悩みを打ち明けた。興味もない話だろうに、彼は年上の中年男性の情けない性事情を、バカにせず聞いてくれた。初対面ながらも会話の中で安心感があるのは、彼が聞き上手な証拠だろう。

「まあ、いわゆるED気味、というのかな。一応勃起もするし、射精もできるんだが、昔と比べて明らかに機能が鈍っていてね。半立ちのまま萎えてしまうことも少なくないし、気持ちよくてもイケない日もある。結婚相手も恋人もいないし、立場上身近な女性には頼りづらくてね。それで出張に来ている今、男性のプロならなんとかしてくれないかと期待して呼んでしまった。こんなことは、本来の使い方ではないと分かっているんだが…」

「なるほど。じゃあ佐島さんは、バリバリのゲイではないんですね」

「バリバリのというか、男性とはしたことがないから、するとしたらミア君が初めてだよ」

「わぁ！じゃあ僕、もしかしたら佐島さんの初めての男になるかもなんですね。やば、ちょっと燃えてきたかも。これは僕の実力を出し切るしかないですね」

会話の途中に混じる砕けた口調に親しみがわき、ほどよく身体に触れる距離感が心地いい。ミアは不思議な子で、私たちの年の差から来る違和感を自然と取り払ってくれる。10分ほどしか話していないのに、すっかり心が安らいだ。ただ、私はミアに癒してもらえるが、彼にとっては色々と負担の大きい日になるだろう。こんな厄介者を相手にするなど、自分が逆の立場だったらポジティブには受け入れられない。

「ありがとう。ミア君が良い子そうでよかったよ。でも申し訳ないけれど、君の技術があっても、場合によっては勃たたないかもしれない。酒も入っているし...。ごめんね、不甲斐なくて」

「いえいえ！普通に初対面の相手になんて、誰でも緊張すると思いますし。事情はお伺いしましたから、僕に無理に入れようと思わなくても大丈夫です。その気になったらで！」

しかしながら、ミアは背後から光がさすほどに優しい子だった。にこりと笑って、私の手を握ってくれる。よかった、お店のおすすめを信じてよかったと、この段階で軽く赤面しそうになった。

けれども、やはり彼はその道のプロだった。ずっと近づき、私と密着したかと思うと、いきなり耳元に口を寄せてきた。息が当たる距離感に、思わずびくりと身が縮む。その硬直した体の真ん中に手を伸ばして、先ほど話題になった部分を軽く撫でながら、甘い声を耳に注いでくる。

「まあでも…。僕は佐島さんのこと、全力でその気にさせようと思ってますからね？」

ふふ、と笑う声は、天使というより小悪魔に近い。いきなりの変化に、頭が追いつかなかった。そして私の世界が止まっているうちに、彼は着替えてきますねと言ってバッグを持ち、バスルームの方に向かっていった。その後ろ姿を見ながら、私は頭を抱えてしまう。やっぱりミアは、普通の大学生とは少し違うかもしれない。

しかも着替え終わったミアは、面積がとても小さい白いパンツ一枚だけを身に付けてベッドルームに戻ってきた。大事な部分は隠れているが、あえて見えないのが逆にいやらしい。色が白いせいで、もっと部屋が明るければ透けて中が見えてしまいそうだ。大胆な格好をしたミアを見てしまうと、とうとう彼を見る目つきが本格的に変わってしまう。

「な、なんて格好なんだ…」

「接客するときは、基本的にこの衣装なんです。似合ってますか？」

「似合っている…、んじゃないかな？」

「そこはちゃんと、似合ってるって言ってほしかったんですけど。さあ、じゃあ佐島さんも、今着てる服は全部脱いでくださいね」

「っ、全部！？」

けれども私が彼を直視できずにいると、ベッドにタオルを敷いていく彼は、私にも服を脱ぐように指示してきた。そもそも下着とバスローブしか着ていないが、やはり全裸になるのは抵抗がある。ただ、そんな反応にも慣れたミアは、楽しそうに笑って準備を進めていた。

「はい。でも最初はマッサージからですし。オイルがつくのを防ぐ意味合いもあるので、ちゃんとタオルで隠しますのでご安心ください」

「う、うつぶせで？仰向けで？」

「佐島さんの感じだと、最初はうつぶせからがよさそうですね。恥ずかしいようでしたら、僕はもう一度バスルームに行ってきますが...」

「いや、大丈夫だ、そんなに何度も手間はかけられない。ただ、正面から見られると落ち着かないから、後ろを向いていてくれないか...」

「分かりました。では服を脱いで、うつぶせになったら声をかけてくださいね」

くすくすと自分の背中の奥で、ミアが楽しそうに笑う気配がする。年下の男をそういう目的で呼んで、今更恥じらう必要などあるかと思うのに、相手がいると緊張するものだ。なので私はささっと服を脱いで、なるべく素早くタオルの敷かれたベッドにうつぶせで寝転んだ。そして、ふう、と一つ息を吐いてから、律儀に後ろ向きで座って待っているミアに声をかける。



「ミア君、待たせたね。準備ができたよ」

「はい。それでは今から始めていきますね。よろしくお願いします」

「う、わ...!？」

私の声を聞いたミアが、背中にふわりとタオルをかけてくれる。けれどその上から、ずしりと重みが加わって、いきなり抱きしめられたので声が出てしまった。むちりと肩や太もみに当たったミアの肌が、男のものとは思えないほど柔らかな感触だ。当たり前だが、やはり普通のマッサージではないのだなと再確認する。しかし、最初の抱きつきは驚いたが、開始してしばらくは通常のオイルマッサージだった。背中や肩、脚をまんべんなく刺激され、少しうとうとしてしまう。

「結構凝ってます。お疲れなんですね」

「そうかもしれない。最近は働きづめだったから」

「じゃあ頑張ってる佐島さんを、僕がちゃんと癒してあげなきゃ」

ミアは揉みほぐしも得意なのか、会話とマッサージだけでも十分彼を呼んだ価値があるくらいに気持ちよかった。もういっそ、EDのことなど忘れて眠りに入っても元は取れそうだ。そう思うくらいには気を許していた時に、ふと背中のタオルがよけられた。おや、どうしたのかと思うと、かわりにもっと重みのあって、あたたかいものが背後を覆う。

気が付けば、ミアの身体が自分と密着していた。私も彼もほとんど服を着ていないから、素肌同士がぴたりと触れあっている。うわ、そんな大胆なと思っている

と、オイルで濡れた手が、ぬるりと内股に入り込んできた。ふにりと指で刺激された場所が、自分でもはっきり分かるほどの反応を見せている。思いがけない変化に、私は衝撃を受けた。

「...勃起している」

「はい。まだ完全になって感じではないですけど。でも触っただけで、大きいのが分かりますね？」

「そ、そうかな？」

「ここもコリコリしてます。いっぱい溜まってそう」

「う、うゝ...！」

すりすり、くにくにと双球が揉まれると、つい声が出た。優しく触れられているだけなのに、なぜか猛烈に気持ちがいい。相手が同じ男でツボが分かっているとか、そもそもプロだからとか、色々理由はあるだろう。それでも、ただの軽い触れあいでもここまでの反応を示していることが、あまりにも久しぶりだ。何かを求めるもどかしさに、つい腰が動く。快感を得るために積極的になるなんて、ここ数年は忘れかけていた感覚だ。

「佐島さん。次は仰向けになっていきましょうか」

うつぶせはもう限界だと思ったころ、願ってもいない声がかかる。どうにか大人として余裕を見せたが、本当はもっと慌てて身体を反転させたかった。開放的に

なった自身を、ミアは一体どうしてくれるのだろう。期待感が渦巻いて、彼から目が離せない。

私が仰向けになると、彼は脚の間に座り込んだ。そのままかがんで、太ももや熱を撫でる。

「わぁ、すごい。佐島さんのコレ、見てるだけでゾクゾクしちゃいます。でも僕、やっぱり見てるだけなんていい子にされてられないなぁ？」

「っ、ミ、ミア君、わ、うわ...！」

そして彼は、私の熱の周りや先端、側面に何度もキスをして、ねとりと舐めあげた。舌全体がべっとりと根元から上に移動して、頂点に達すると、全てが彼の口内に飲み込まれていく。唾液をたっぷり含んだミアの口の中は、腰が抜けそうなくらい心地いい。全体に纏わりつく舌の使い方も、歯を立てない気遣いも、吸い上げる加減も絶妙だ。思わず彼の頭に手を当てて、もっと奥まで飲み込ませたくなる。

「はぁ、っ、上手すぎないか、ミア君...！」

「ん、ふふ、そお？」

しかもこの、普通の青年だと思った彼の、妖艶な笑い方だ。見ているだけで、忘れていた男性としての欲望が刺激される。かわいい、一生懸命にしてくれて嬉しい。そんな彼を、私は既にどうにかしたいと思っている。つい一晩前までは、いざとなっても勃たないことが悩みだったにもかかわらずだ。

彼の口内にある熱は、もう十分な固さをもっていた。少なくとも、入れられる程度にはなっただろう。しかし、ミアは容赦がない。そのまま口を離してもらえないと困ると、私は彼に声をかけた。

「うう、ミ、ア、ミア君。もういい、出そうだから離してくれ...！」

「う～ん、やあだ。僕、佐島さんの飲みたいもん」

「そんな...、美味しいものじゃないだろう」

「だめなの？それなら、佐島さんが我慢できなくなることしちゃう」

「んぐっ！？」

だがミアときたら、持ちうるテクニックを駆使して私をイカせようとしてきた。なんだかものすごい音を立てて吸われている。喉の奥まで咥えこまれて逃げられない。トロトロの口内にいるだけでも気持ちいいのに、なんだその技は。気持ちが良いすぎる。フェラの腕前にランキングをつけるなら、過去の女性に大幅な差をつけてミアが1位だ。まずい、これだと本当に彼に出してしまう。どうにか我慢しなければと、私は軽く腰を引いた。

「っ、ミア、ダメだ、離しなさい...っ！」

「ん、んう、気持ちいいからって逃げないでよ。溜まってる濃いやつ、全部僕にぶっかけて？」

「ッッ！！？」

けれどもミアは、私の理性を破壊しにきた。れろりと亀頭を一舐めするのに、手はしっかりと私を扱っている。隙が無い。我慢させてくれない。無理だ、こんなのどうあがいてもイク、と身構えると、ミアはぱくりと熱を口に含んで吸い上げてきた。

「は、あ、出る、出、え、ううっっ！！？」

びゅくりと、こらえきれずに精液が吹き出す。しかし容赦のないミアは、ただ出ただけでは許してくれない。一滴も逃すまいと、ちゅう、ちゅう、と最後の最後まで吸いつくされる。

「ふ、ッ、で、出た、出たから、ミア、もう...！」

「ん、ん～～...！」

ぐい、ぐい、と彼の頭をどうにか引きはがすと、彼は見せつけるようにごくりと喉仏を上下させた。それがどういった意味合いを持つのか察した私は、慌てて近くにあったミネラルウォーターのペットボトルを差し出す。

「なっ、なにしてるんだ！？飲まなくてもいい！そこまでしろとは言っていないのに、君って子は...！」

「すごいドロドロでしたよ。めっちゃ出てました」

「それも言わなくていい！」

精液など飲んでも美味しくはないだろうに、なんとも思っていないのか、ミアはけろりとしていた。恥ずかしいことばかり言うので、黙らせるために無理やり水を飲んでもらう。その間に、年甲斐もなく暴発したことを憂いた。

だが、多くの時間をかけずに達することができたのは、嬉しいことでもある。なんだ、状況さえ整えばちゃんと出せるじゃないかと、自分でも少しほっとしていた。それを見抜いたのか、ベッドの上で胡坐をかく私に、ミアが背後から抱き着いてくる。

「佐島さん、普通に出せてましたよ？まだまだ全然、現役ですね」

じゃれあいのように耳元で甘える彼は、肩に巻きつけた手を下にすべらせた。つい、と指先で弄ばれるのは、先ほど射精したばかりの熱だ。しかし、萎えていくはずのそこは、なんとまだ勃起の兆しを見せている。

は、と思わず息を飲んだ。1回でもイケれば上出来と思っていたが、まさか今日は2回戦もと、思わずミアの方を振り向く。すると彼は、ゆったり目を細めて私を見つめ返す。

「どうです？その気になってきました？」

くい、くい、と腰を擦りつけられると、ぐわりと腹の奥が熱くなる。そう、この感覚だ。求められると答えたくなる。本能的に抱きたくなる。相手にかぶりつきたくなる衝動が、再び湧き上がってきた。

気づけばミアを押し倒していた。いつの間にか硬度を取り戻した熱を、ミアの腰に擦りつけてしまう。早く、早く入れなければと焦る私を見て、ミアは脚を開き、自分のお尻の孔へと指を近づけた。

「それ、もう入れられますよ？ほらここ、準備万端」

彼が指先に力を入れると、くぱりと開かれたそこから何かが滴る。粘度からすると、ローションなのだろうか。そうか、男性は濡れないから先に準備がいるのか、などとは思くせに、初対面の男にいきなり入れるのはどうなんだとか、ゴムくらいはつけるべきだといった、細かいことを考える能力を失っていた。孔とはいえど、入れる場所は尻側だというのに、全く気にならない。早くミアに入れなければ、入れたい、一刻も早くと、高まる興奮が抑えきれなかった。自分の熱に手を当てて、狙いを定める。先端が埋まると、あとは力を入れればどんどん飲み込まれていった。きゅ、と縮んだかと思えば、ふわりと緩む瞬間がある。それでいて心地よく自分を締め付けてくれる極上の孔に、私はどこまでも感動していた。

「あ、は、す、ごいっ、いっぱい...！佐島さ、お、奥まで、もっと奥までしてっ」

しかもこの、ぎゅう、と抱きついてくるミアの愛らしさだ。本当に同じ男かと思うほどにかわいらしい。自分を受け入れてくれる健気さもいい。かわいい、もっ

と気持ちよくしたい、欲を言えば声を上げて鳴く姿も見たいと、勝手に息が荒くなる。

「んは、あ、ああ、お、っきい、佐島さん...！すご、僕も、気持ちい、ん、んっ」

だが彼は、私をすぐにイカせるほどの実力者だ。ただ入れて前後に動くだけでは、ミアの顔色すら変えられないだろう。でも、今は演技めいた言葉で私を乗せようとする彼を、本気でよがらせたい。何かないのか、きっかけさえ掴めればと、私は適度に腰を動かし、角度をつけて突いたりしながら様子をうかがう。

「は、はあ、あ、いい、ん、ッ...！ふ、ああ、あっ、ん、んんっ！！っひ、は、あ、あ、んんう」

そして色々と試すうちに、徐々に彼の喘ぎ方の特徴を捉えてきた。基本的にはわざと出した声が9割だが、時々表情と声色が変わる時がある。痛みとは別種の何かを、ぐっと堪えているような顔に、止まる息。切羽詰まった気配の後、どこかほっとしたように肩の力を抜く瞬間。何度も何度も出し入れをすれば、それがどのタイミングなのかが分かってきた。

例外もありそうだが、大体は同じ時だ。ミアの反応が変わる瞬間は、彼の腹側の、他の場所にはないしこりに触れた時に起こる。しこりを擦ったり突いたりした時だけ、声を我慢しているのに、身体が動く気がする。真偽を確かめるために、私はあえてそこに先端を当てながら彼に聞いた。



「ここ、今私が擦っているところだけど」

「...っ！」

「ここはミア君にとって、特別に気持ちがいいところかな？」

ただ、聞いてはみたが、それはただの答え合わせに近かった。本人からの言質を取りに言ったに過ぎない。現に彼は、感じる一点を擦る時、びく、びく、と反応する身体をどうにか抑えている。

しかしながら、やはりミアは慣れた子だ。このような展開はお手の物なのか、彼は自分から出ている私の根元を指でなぞって、上目づかいに言う。

「さぁ、どうだろう？僕がエッチになっちゃうかどうかは...。佐島さんのでいっぱい押して、確かめてみて？」

弱みを握れば、少しは彼の中身が見られるかと思ったが、まだまだミアは余裕らしい。明らかに私を乗せるために放たれた台詞に、つい息が漏れた。売り言葉に買い言葉というのだろうか。大人げないが、私も少し意地になっているらしい。風俗サービスなのだから、ミアが私の気分を上げる振舞いをするのは当然だ。だがそれは逆に、ミアが演技できるうちは、行為そのものがあまり良くないことの裏返しだ。やはり男として、目の前の相手が満足できていないのは、どうもプライドが許さない。昨日までの自分ならともかく、この下半身が元気であるならば、私はどうしてもミアを喘がせたかった。なのでここは、意表をつく作戦で行こうと思う。

ミアはきっと、私をED気味の中年男性くらいにしか思っていないだろう。けれど彼の印象はともかく、私はあくまで半世紀近く生きた男なのだ。しかも同い年の男性と比較し、経験は多いほうだと思う。彼ほどではないが、私にも数多くの相手を満足させてきた自負はある。

一旦腰の動きを止めると、おや、とミアは首をかしげた。私に異変が起きたと思ったのか、彼は私に抱きつき、どうしたのかと声をかけてくる。その時を待っていたので、私は彼の背中と腰に腕を回し、ぐいっとミアの身体を持ち上げた。え、と動揺しているミアには多くを語らず、そのままあぐらをかいた自分の上に、どすんとミアをおろす。

「え、何...? って、や、ちょっ、ああんうううッ! ?」

無言の私を見守る余裕が命取りだ。構えていない彼は、思い切り声を上げて背をしならせた。彼のいい場所を狙ったので、角度的にはミアの弱点を思い切り擦ったことだろう。経験豊富な彼にも予想外だったのか、ミアはびく、びく、と身体を震わせながら、焦点の合わない目で天井を見ている。は、は、と息を切らしている彼は、私を見る顔にどこか怯えが混じっていた。

「んは、は、はっ、はあ...ッ!! ?」

「かわいい声が出ていたよ? 今のは演技じゃなかったね」

「や、あ、そ、それは...! あの、びっくりして、つい」

「いいよ。飾らない君の声が聞きたい」

「うう...」

そして私が彼に声をかけると、わたわたと言いつていた。そんな姿が愛らしくて頭を撫でると、かぁ、と頬を染める。これが全て演技なら大したものだが、おそらく今のあれこれはミアの素の部分だと思う。

お店からおすすめされるくらいなので、ミア自身はきっと場数を踏んでいて、接客にも定評がある男の子なのだろう。だからこそ、男性とは経験がない私を軽んじてしまうのは分かる話だ。その簡単にコントロールできるはずの相手から突然ペースを乱されたのだから、恥ずかしくなるのはうなずける。

だが、年上の男を舐めてかかるのはよくない。不必要に相手を煽ったら、どうなるか分からせてあげなくては。

まだ突き上げられた余韻が残るのか、ミアは呼吸を整えるのに必死だ。けれど彼が落ち着くのを待たずに、ぐ、ぐ、と腰を動かし、ミアの好きな場所を押し上げる。感じないよう彼が腰を浮かせるのは予想済みだったので、肩に手を回して自分の方へと引き寄せた。

「ひ、ッ、あ、ああ、ま、って、や、待ってえ...！」

「かわいらしい君を見ていると、どうも待ちきれなくてね」

「ん、あ、ああ、だ、め、ッ、同じとこ、ばっかりいい...ッ！は、ん、んんうううう...！！や、だ、そこだめ、あんまりしちゃだめだからっ！」

「おかしいね。たくさん押していいんじゃないかったかな？ほら、腰が浮いてる。もっと私の方においで」

「はふ、う、う、う〜〜っ！んひっ、ッ、あ、や、まっ、あ、ああああ...！！」

私がミアを抱きしめると、彼は本格的に焦り始めたのか、必死に体をひねって私から逃げようとしていた。けれど、それを抑えられる筋力は持ち合わせている。体力づくりのために、日頃からジムに通っていてよかった。おかげで彼くらいの男性も、体勢が有利なら抑え込むことも可能だ。

「ひあ、あ、ああっ！や、だ、離して！」

「この手を離したら、私から逃げるつもりだろう？それじゃあ離してあげられないな」

「ッ、あ、う、なっ、なんで...！？佐島さん、男は、初めてってえ...！」

「それは本当に初めてだよ。でも、相手を抱く感覚は通じるものがあるかな。ミアは浅いところが好き？それとも、深いところがいいのかな」

「っあ、あ、や、だああ...っ！あふ、う、気持ちいところ、当てすぎだからあ...！ん、あ、や、やばい、ほんとにやばいいいっ！！あ、や、やっ、～～～ッッッ！！」

ただ、暴れる彼を抱きしめて腰を突き上げていると、だめ、だめと言ってばかりの彼が、いきなり強く抱きついてきた。息を止めて全身を痙攣させてから、くたりと脱力する。ミアの様子はさながら女性がイッたときのような感じだったが、それを見て私は増々感心してしまった。芸達者な子だ、イッた演技もできるのかと、つい彼の頭を撫でていた。

「すごいな。ミア君、そういうこともできるのか」

「っ、っ...？なに、が...？」

しかも彼のプロ意識は素晴らしく、私が声をかけると、ぽやんととろけた顔でこちらを見つめてくる。それもまた、イッた直後のようで興奮した。もちろん男性がイクなら射精するわけだが、私がノーマルな性癖だと知っているから、あえて演技してくれたのだろう。なんて健気な子なんだと、思わず彼の額にキスをしていた。

ここまでしてくれているのだから、私だって彼にお返しをしなければなるまい。ミアにとっては仕事でも、気持ちよくなるのは悪いことではないだろう。なので脱力してもたれる彼を支えながら、ぬかるむ孔に深く自身を埋めていった。その際にいい場所をえぐりながら腰を進めると、彼はとろけた目を大きく開いて、高い声を上げて鳴き始める。

「ひいいいっ！！？ふあ、あ、やあああ...っ！なん、で、今だめ、だめえっ！！」

「どうして？こんなに気持ちよさそうなのに」

「んふ、っ、よ、よすぎ、てええ...ッ！だ、め、できない、仕事できなく、なっちゃ」

「それなら私が、仕事のことを忘れさせてあげよう」

「〜〜〜ッああああ、あ、あゝっっ！！んや、め、で、イッ、た、イッたの、今あっ！あふっ、ッ、イッで、る、のにいっ！！ひう、うう、も、や、止め、て、あ、あ、あ、っ、ひ、い、い、〜〜〜っっ！！！！？」

ガクン、とのけ反るミアの演技は迫真のもので、彼がイッたという言葉がうっかり信じてしまいそうなほどだった。乱れる彼を離さずいい場所や奥をえぐると、掠れているのに甘い、感じて仕方がないといった声を出している。時折、私を振り切ろうと身体を左右に倒そうとしているときがあったが、暴れても無意味なことを悟ると、最終的に私にすがって泣くようになった。

「んは、は、はひっ、いいイクイク、ッ、うううんっ！！っ、は、は、や、お、お願い、も、もお許し...ッ！やめ、で、イッちゃう、またイッちゃうからあっ！！」

「ん？でもミアのからは出ていないよ。先走りでよく濡れているみたいだけど」  
「あゝ、あ、ちが、あふ...っ！！や、またイク、イッ、ん、んゝ～～  
～ッッ！！っ、はあっ、あ、ああ、っんうう、うゝうううっ...！！」

は、は、と荒く息を吐きながら必死に首を振るミアからは、既に余裕は感じられない。そのくせに、なぜ彼はイッたなどという嘘をつくのか私には分からなかった。女性がイッたからと一区切りするのと一緒に、彼もそれと同じ手法で逃げようと考えているのだろうか。だとしたら、ミアはまだ頭が回っている。中はきつく締まっていて、先ほどより狭いくらいだが、この締め付けすら意図的なものだというのか。彼の年にしてこの技巧とは恐れ入ると、ミアの頭を抱えながらゆっくり彼の中を堪能し続けた。

けれど、そうやって私が夢中で腰を振っていると、ミアの雰囲気が変わった。ぽろ、ぽろ、とこぼす涙に切なさが混じり、口調が弱々しく変わっていく。

「っ、う、うう...！佐島、さ、ねえ、俺、ほんとに...っ！変にな、っちゃ、あ、あああ...！」

そしてとうとう、彼の一人称が「俺」に変わった。会ったときには「僕」と言っていたはずだが、それもミアというキャラクターを演じるためのものだったらしい。ほんの少しではあるが、彼の素の部分を引き出せたことが嬉しかった。けれど人間は欲深いので、1つ知ると次を求めてしまう。さらなる内側が見たくなった私は、彼の頭を自分に引き寄せて、耳に口を近づける。

「ミア君の素が出ちゃってる。いっぱいいいっぱいな君もかわいいな」

「ふああっ！？」

はむりと耳を甘く噛むと、ガクンと背が反った。あわてて私から顔を遠ざける彼は、頬も耳も真っ赤だった。うろたえる表情からは、色気はあれど妖艶さが減っている。むしろ初心でかわいいくらいで、もっといじめたくなる可憐さがあった。

「さっきまで僕って言ってたけれど、普段は俺って言ってるのかい？」

「へ...？あ、あっ！？や、ちがっ、間違い！今のは間違いでっ」

「いいよ、ミア君が言いやすい方で。私は演技抜きの君が見たい」

「っ、や、やだ、ミアで、いさせてよお...！おかしくなる、見せちゃダメなところ見せちゃう」

「全部見せてくれるまでやめないよ？」

「はふ、うううっ！！？」

ミアの源氏名を使うときには、その人物になりきることで自分を保ちたいのか、彼は素の一人称が漏れ出たことを気にしていた。けれど隠したいと言われたら、余計に暴きたくなるというものだ。もっと見せろと言わんばかりに、彼の奥を擦る。

そうしてしつこく彼をいじめていると、最奥だと思っていた壁が徐々に下に降りてきているような感覚がした。そんなに奥まで入れても大丈夫なのだろうかと思ったが、彼を見る限り痛がってはいないようだ。ならばこのまま先に進んでしまえと、シーツを握りしめるミアの手を外し、強引に深い部分に自身を押し込んだ。

「ふ、あっ、っあああああ！！？やあ、だめ、そこ入れちゃだめええっ！！」

「逃げずに腰を落とさない」

「ひいいうううう...っ！！んあ、あ、イッ、あ、ンンあゝ ああああ  
ああっっ！！」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー